保健体育部会

＜県研究主題＞
心と体を一体としてとらえ、生徒一人ひとりが生涯にわたって運動に親しみ、自らの健康・体力つくりを考えて行動する資質や能力を培う学習指導と評価の工夫・改善

提案１　　提案者　濵口　慎介　（県央地区）

＜研究主題＞
ハードリング動作の視覚化による指導と評価の工夫
～タブレット端末の活用による課題の理解と主体的な取組～

１　提案内容
タブレットを使用し、自己のハードリングの動作を視覚的にとらえ、課題のイメージ化を図る。

２　協議内容
（１）　質疑等
①　タブレットを使った保健の授業は知っているが、体育実技の場面での活用は、視覚に訴えることができ、優れていると感じた。１回の授業での運動量はどのくらい確保できるのか？
A：毎時間タブレットを使用するわけではなく、１１時間中５時間で使用した。タブレットに見入る時間が多くならないよう声かけをしている。

②　撮影する場所について、どんな工夫があるか。また、アドバイスする側の生徒の深まりは、どんなところで見られたか。
A：レーンとレーンの間に撮影スペースを設けた。レーン２つ分が望ましい。
単元はじめに、見本動画を提示していたこともあり、専門用語を使っての話合いやアドバイスができるようになっていた。

③　タブレットの管理について、学校に配付された４０台のタブレットを体育科で使用できるのか、また１班何名で活動したのか。
A：26 台を体育科として確保し、動画を保存する上で１組１班は、No.1 という形で固定して使用させた。班は３、４名にすると撮影を失敗してしまうかもしれないというプレッシャーがあると考えたため、１班６名とした。

④　タブレットを使うことで以前の授業との違いはあったか。
A：見本を見せたり一時停止ができたりするので、説明に時間がかからなくなった。

⑤　生徒にどんな変容があったか。
A：苦手意識のある生徒もタブレット使用でやる気が感じられるようになった。

⑥　どんな場面を評価したのか。録画した動画を見ながら評価したのか。

Ａ：座学中の話合いは評価した。生徒が撮った動画は評価資料として使用していない。

⑦　ハードルは、どんなものを使ったのか、また、タイムはどうしたのか。

Ａ：ソフトハードルを使用した。タイムは、初回とラストで計測し、タブレットは、あくまでもフォーム改善のために使用した。

（２）　動きのイメージ化が苦手な生徒への指導方法

・動画のみでなく、静止画（連続写真など）も使用すると効果的である。

・目的が何なのか、どこに使うのが効果的かを考えて使用する。

３　まとめ

学習指導要領では、従来の「積極的に運動に親しむ～」から、「生涯にわたって運動に親しむ～」に変化している。タブレットを使って動画を見ることにより、上達しようという意欲が高まる。意欲が高まることにより継続的に生涯にわたって運動に親しもうとする姿勢を育むことができる。言語活動の観点からも動画を見ることでアドバイスできるようになる生徒も出てくる。

ＩＣＴの活用としては、①思考の可視化　②瞬時の共有　③試行のくり返しで授業展開できると考えられる。

活用の意義としては、課題解決に向けた主体的・協働的・探究的な学びを実現できる点、個々の能力や特性に応じた学びを実現できる点が挙げられる。

是非、ＩＣＴを取り入れた授業を率先して行ってほしい。

評価については、知識・理解、思考・判断は、指導後すぐに評価できるものとし、関心・意欲・態度、技能は、指導後一定の期間を設けて評価するようにしてほしい。

提案２　　提案者　田中　啓太（横浜地区）

＜研究主題＞

指導と評価の一体化を図る指導実践

～「見通す」「振り返る」学習活動を位置づけた授業づくり～

１　提案内容

発問を工夫し生徒の興味・関心を高め、ねらいを明確化した「見通す」学習活動及び、学んだ知識が活用できる課題解決学習を行い、「振り返る」学習活動を位置づけた授業実践。

（１）　中学校保健分野の目標

個人生活における健康・安全に関する理解を通して、生涯を通じて自らの健康を適切に管理し、改善していく資質や能力を育てる。

①　個人生活を中心に科学的に理解することが、大きなテーマと言い換えることができる。

②　現在や将来の生活健康を適切に管理し改善するための思考力や判断力などを身に付ける。

（２）　「見通す」「振り返る」の具体

①　「見通す」とは

・子どもが「身に付けたい」ことや単元のねらいをしっかり把握・確認すること。

・教員は指導と評価ができるように単元計画・評価計画を充実させること。

②　「振り返る」とは

・子どもが「何がわかったのか」「何ができるようになったのか」「今後に生かせる学び方は何か」を把握すること。

・教員は単元のねらいが身に付いているかを評価することや、単元目標を実現する指導ができたかを把握すること。

③　保健学習の全てが実生活とつながっており、「見通す」と「振り返り」の連続であり積み重ねである。

（３）　本研究の重点①「見通す」

学習内容が「自分には関係ない」と言って意欲が出ない生徒をそのままにせず、実生活に基づいた主体的な発問を工夫する。それが関心・意欲の高まりにつながり、学習の「見通し」を自然ともち、学習のねらいを確実に把握することになると考えられる。

（４）　本研究の重点②「科学的」な思考

身近で、実生活に基づく発問から、普段の生活で何気なく起きている心身の変化や現象、健康・安全に関する環境について、科学的に思考することで理解が深まると考えられる。

（５）　本研究の重点③「話合い活動」

実生活の課題を、個人で考え、グループで考察した後、さらに全体で共有するような課題解決的な学習を通して、思考力と判断力を高める。

２　協議内容

（１）　質疑等

・発問の回答として、期待した内容でない場合は、意見をテーマと関連した助言をする。

・熱中症に関する内容の知識を補うために、壁新聞等で示すような工夫が必要である。

・関心や意欲を高める教材、教具としては、瞳孔の変化や水のろ過実験がある。

（２）　全体協議

「確かな学力」を育成する年間計画や評価計画の工夫・改善、基礎的基本的な知識と技能を習得させる授業改善

①　中学３年で、体を動かす楽しさ、生涯にわたって運動に親しむ生徒を目指すために、１、２年生では男女共習を行う中で、異性に対する配慮を学ぶことも大切である。３年では、体を動かす楽しさを味わうようなチーム分けをして授業を展開している。

②　技能の高まりの差を少なくするには、小中連携の視点をもち、系統的な指導が必要である。

男女共習では、年間計画と評価規準を明らかにしておくことが大切である。

③　評価方法と見取りの規準を明らかにすることが大切である。具体的には、思考・判断を見取る際、カードやノートへの記述内容等がめあてに即して書かれているか、作戦会議では、専門用語、種目の特性について言及しているか等を見取ることも考えられる。

④　ＩＣＴの活用は、その場でフィードバックできるのでとても有効である。使う場面や単

元のデザインを明確にした上で活用するのがよい。

⑤　保健学習は、４人班やコの字隊形で行う。プリントは班に１枚にして、みんなで取り組み、知識の共有をすることを大切にするとよい。

⑥　毎時間の準備運動でドリル練習をすることで基礎基本の定着を図る。タスクゲームで達成しやすい練習を積み重ねる。ボールに対する恐怖心を取り除くために、ボールの空気を少し抜いたり、ソフトバレーボールを使ったりしている。

⑦　武道において、興味・関心を高めるために歴史を紹介している。柔道において、受け身の大切さを研修で学んだものを実践した。１、２年生での学びを３年生で復習し、段階を踏んで指導した。４人組で技を見せ合い、アドバイスを相互に行うことで効果的に習得できた。

⑧　水泳で水に顔をつけられない生徒に対し、小学校と連携して４年間で習得することを目標としているが難しい。しかし、継続的に学びを深める姿勢が大切だと思う。生涯スポーツのために、夢中になれる種目を見付けるための授業をデザインすることを心がける。

３　まとめ

（１）　保健授業について

体育分野に比べて、保健分野に苦手意識を持つ生徒が多いのはなぜか。一つは活動が少ないこと、もう一つは我々の苦手意識が生徒に伝わっていることが理由であると考えられる。保健の授業を計画的にまとめて実施し、学びを継続させるために、時期や学校の実態に合わせて適切に年間計画を作成する必要がある。

（２）　「見通す」「振り返る」について

保健の授業で、何を学習するのか、自分に何が身に付くか、というねらいを持たせることが大切である。生徒は、ねらいが曖昧だと「つまらない」と感じる。「見通すこと」「振り返ること」は我々も同じであり、生徒と教員が共有することが大切である。また、１時間の中でどこにメインを持っていくか、計画を立てる。主となる発問は、課題提示への発問、課題にせまる発問、課題を振り返る発問の３つまでとするなどを踏まえて指導案を作成する必要がある。

（３）　主体的な課題の発見について

参加型の保健学習、話合い活動、実験実習や調べ学習等は、生徒の関心・意欲を高め、思考・判断を深めることにつながる。さまざまなアイデアをこらし、教員が授業を楽しめるようになると、生徒も楽しくなる。体育において、できない生徒をできるようにするための引き出しがあるように、ねらいを持った指導で生徒の興味、関心を引き出す研究を深めることが大切である。